



さく ぶん ぶ もん にゆう しょう さく ひん
作文部門入賞作品



ない かく そう り だい じん しょう
内閣総理大臣賞

ライバル

あき た けんひがしなる せ そんりつひがしなる せ
秋田県東成瀬村立東成瀬中学校3年 **高橋 颯太**

秋田県のライバルは新潟県だと僕は勝手に思っている。その理由は両県とも米所だからだ。

ライバル県である新潟は「コシヒカリ」という品種で全国に沢山のファンがいる。特に魚沼産のコシヒカリは信者といっているくらいファンがいる。しかし、そうした新潟県の独走体制に秋田県も黙っていない。秋田県は「あきたこまち」に続き「サキホコレ」という品種を開発し、全国のお米ファンの胃袋をつかんだ。より美味しいお米の品種を開発するために、両県は切磋琢磨しながらこれまでずっと頑張ってきた。だから両県は良きライバル関係にある。僕はそう思っていた。

しかし、今年、両県のお米がピンチになっている。異常気象により、秋の収穫が危ぶまれているのだ。

今年の秋田県の夏は天災続きだった。七月の豪雨を始めとし、その後、異常な暑さが続いた。僕の通っている中学校でも、夏休み中、暑さ対策のために部活動が一週間中止になったくらいだ。熱中症にならないよう、僕は極力外出をひかえた。そのため、今年の夏休みは何となくぱっとしない感じで終わった。全く——僕は青空の中、ギラギラ照りつける太陽を恨めしく思った。中学校生活最後の夏休みが奪われてしまったように思えた。

ところが、この異常気象はお米にも大打撃を与えているらしい。秋田県の新聞に、由利本荘市では、水不足で稲に実るはずのお米の量が激減しているそう。そしてその記事には稲が倒れている田んぼの写真が載せられていた。また、その田んぼの持ち主らしい農家の人が暗い表情で稲穂を手をしている新聞もあった。

僕は驚いた。あんなに豪雨だったのに、水不足の地域があったことが信じられなかった。田んぼが黄金色に染まれば、お米もたくさん収穫できるものだと思っていた。秋田県に生まれ育ちながら、自分の県の特産品について全く無知であることに、僕は恥ずかしく思った。それと同時に、秋田県以外の地域のお米の生育状況が心配になった。僕は新潟県の水稲に関する情報がネットに載っていないか検索した。秋田県のライバルである新潟県のお米の事が心配だった。ライバルであるけれど、無事であってほしい。そんな祈るような気持ちで新潟県のホームページを検索した。すると、秋田県と同じように高温による被害が出ていることが分かった。

新潟県のホームページを見ながら、僕は農業関係でこんなページがあるんだな、と感心した。そのページとは農業園芸課の情報である。今年度の異常高温に対して、色々な対策の情報がぎっしりと載せられている。美味しいお米を作るために、陰でこんな努力があった事を僕は初めて知った。秋田県はどうなんだろう。僕は秋田県の稲作情報について検索した。すると秋田県でも同じように高温対策情報が載せられていた。僕はその画面をしばらくの間、ずっと見つめていた。

毎日の食卓に出てくるごはん。僕はそれを当たり前のように食べていた。しかし、僕の家の食卓にあがるまで、そのご飯はたくさんの方が必要なのだ。お米を作る農家の方々は、天候に気を遣いながら頑張っている。そして、その管理をサポートする人達も農家の人達に有益な情報を流すよう、仕事に取り組んでいる。その他にも僕の知らない所でお米の生産のために働いている人もいるのだろう。そう考えると、食べ物を作ってくれる人に感謝しなければいけないと僕は改めて思った。

猛暑の中で作られた今年のお米。農家の人達にとっては生産が難しい年になった。だからこそ大切に食べなければいけないと僕は思う。今年の秋、早目の稲刈りが始まる。ライバル県も生産量が少しでも多くあってほしい。

※ 作文作品は原文どおりを基本にしますが、明らかな間違いは手直ししました。